

## 研究ノート

# 性役割分担志向性・実行度および愛情・好意度に及ぼす 性別とジェンダー・パーソナリティの影響

土 肥 伊 都 子<sup>1)</sup>

## 〈問題〉

人間の行動や相互作用を考える上で愛は重要なテーマであるにもかかわらず、愛についての組織的研究は少ない。その理由として藤原ら（1983）は、1つには愛は神秘的なもので、愛に合理的説明を与えることをタブー視する風潮があること、また1つには愛を定義し測定することは困難であることを挙げている。青年期における恋愛に関する社会心理学的研究は、「恋愛に対する態度や認知」「異性選択と社会的交換」「恋愛感情と意識」「恋愛の進行と崩壊」におおよそ分けることができる（松井、1990）。しかしこれらの分野の研究も、恋愛行動を一般理論の検証の材料としたにすぎなかったり実態の把握にとどまっている場合が多く、理論的枠組みを検証する研究には至っていないと言えよう。

恋愛に関する社会心理学的研究において、性差（sex differences）は重要な1側面とみなされ、検討されてきた。なぜならば恋愛は男女間の社会的行動であり、男女の差異によって恋愛行動の様相が影響を受けると考えるのは、至極当然のことだからである。例えば、ロマンチックで愛情にあふれているのは男性よりも女性である、とする文化的信念に関する研究（Walster & Walster, 1978）がある。一方それとは正反対に、男性の方がロマンチックであるとする研究（Knox & Sporakowski, 1972）もある。Crawford et al. (1977) は、カップルの男女が葛藤状態に陥った場合、男性は

葛藤を避けようとするが女性は問題を回避することに不満を持つことを明らかにした。ただし、社会心理学や青年心理学などの性行動の調査では、性差は現象の記述に用いられる段階にとどまる傾向が強い。なぜ性差が認められたか、その考察は想像の域を越えていない。現象的に認められる性差は、生物学的要因だけでなく社会的要因によっても形成される。これはジェンダー研究で提唱されてきたことである。こういった視点が恋愛に関する研究に対しても必要ではないか。

ジェンダー、すなわち社会的に定義づけられた男性的性格特性・女性的性格特性が自己概念として取り入れられた時、それを男性性あるいは女性性という。男性性あるいは女性性が恋愛の諸側面と関連することを示唆する研究結果が報告されている。Coleman & Ganong (1985) は恋愛の感情や行動に影響を及ぼしているのは性別よりもジェンダー・タイプであるとした。ジェンダー・タイプはBSRI (Bem Sex Role Inventory; Bem, 1974) で測定された。その結果、両性具有型の個人が最も愛情深いことが明らかにされたのである。

ジェンダーに関する自己概念と恋愛の諸側面の関係を解明する上で、Bem (1981) のジェンダー・スキーマ理論と土肥 (1995) の両性具有性形成モデルが有効であると考えられる。

Bemのジェンダー・スキーマ理論は個人の認知図式としてジェンダー・スキーマを仮定する。ジェンダー・スキーマはあらゆる情報に対して男性的・女性的という性別化（sex-typing）をする

1) 本論文の作成にあたり、杉山貞夫教授、田中国夫教授（関西学院大学名誉教授）、並びに藤原武弘教授にご指導頂きました。また、調査の実施にあたり、菅俊夫教授（関西外国語大学）、日笠祐一氏（関西学院大学社会学部平成2年度卒）にご協力頂きました。ここに記して感謝いたします。

ための枠組みである。そして自己に対して性別化した場合、その個人は男性的男性、あるいは女性的女性になると考えられる。男性の場合、自分は男性であることと男性的特性が結び付きやすく、女性の場合、自分は女性であることと女性的特性が結び付きやすいからである(土肥, 1994a)。ジェンダー・スキーマ理論からは、男性的男性・女性的女性、恋愛相手の選択、性による役割分担への認知、実際の役割分担行動などがジェンダー・ステレオタイプに合致した方向に向かうと予想される。それらはすべてジェンダー・スキーマという共通の要因が関与すると仮定されるからである。

Andersen & Bem (1981) は、お互いに初対面の男女各24名の大学生に対して、一対一で電話を使って話をさせるという実験を行った。そして電話の相手の写真から判断された身体的魅力、その相手との電話での応答における話し方の熱心さ・相手への興味・会話での親密性などとジェンダー・タイプとの関連を調べた。その結果、男性的男性・女性的女性は、写真から判断された相手の身体的魅力の高い場合に積極的な反応を示した。これは、自己概念の形成においてジェンダー・スキーマが強く働く個人は、恋愛の相手の選択基準もジェンダー・スキーマに影響を受けることを示唆したものである。ジェンダー・スキーマが強いと身体的魅力に関するステレオタイプにも敏感になっていると考えられるからである。

さらに恋愛感情の強さはジェンダー・タイプによってどのように異なるであろうか。Erikson (1950) からは、青年期までに自我同一性がほぼ確立したことが前提となっており、成人期前期に異性との親密性が獲得できると示唆される。従ってジェンダー・スキーマによって形成される没個性的な、ステレオタイプ的な個人は、親密性を保ちにくく、真の恋愛感情を保ちにくいのではないかと(土肥, 1995)。そこで、ジェンダー・スキーマ理論からは、ジェンダー・スキーマが強いと仮定される男性的男性・女性的女性は恋愛相手に対する愛情度・好意度が低いと予測される。

次に土肥(1995)の両性具有性形成モデルは、両性具有的な個人の恋愛の諸側面に対する仮説を提供する。このモデルはジェンダー・パーソナリ

ティの形成要因としてジェンダー・スキーマに加えてジェンダー・アイデンティティを新たに提起したものである。Bemのジェンダー・スキーマ理論では、男性的男性・女性的女性はジェンダー・スキーマが強い個人として明確に定義できる。しかしジェンダー・スキーマが弱い場合、両性具有になるのか、男性性も女性性も低い未分化の状態か、が明らかでない。土肥は両性具有型の個人はジェンダーに従うことよりも重要な価値観を持つと考える。例えば人間性や大人性(山口, 1985)などである。そのため自己概念、その中でも特に性格形成等に対してだけは、ジェンダー・スキーマの活性化を抑制する別の人格特性を持つと考える。これがジェンダー・アイデンティティであり、他のジェンダー・タイプにはない人格特性であろうと考えるのである。つまり、両性具有型の個人は自己の性格形成の場合にジェンダー・アイデンティティが強く働きジェンダー・スキーマの影響が弱まると仮定される。

このように両性具有型の個人は、性別化する対象が自己の性格特性に関することかどうか、によってジェンダー・スキーマを活性化するかどうかを決定する。さらに両性具有型の個人は、状況に応じてジェンダー・スキーマを使い分けるという特徴も持つのではないかと考える。例えば職場などの公的な場面における行動、あるいは一般的な男女の役割分担に関する知識においては、ジェンダーの存在を容認しジェンダー・スキーマを活性化させ、それに従った行動や態度表明をするであろう。それに対して私的な、男女一対一の親密な異性関係で現実に行動する場合には、個性を発揮しジェンダーにこだわらない、などの傾向が両性具有型の個人にはみられると考える。真の恋愛は、お互いの代替不可能性を信じ、個性に惹かれ合うことによって成立すると考えるからである。先にあげた Andersen & Bem (1981) では、両性具有型の女性が興味深い対人関係の方略を持つことが指摘されている。両性具有型の女性が聞き手をした場合、彼女らは相手の身体的魅力についてはジェンダー・ステレオタイプを十分意識し、それらと一致した判断をした。にもかかわらず、彼女らは行動においては身体的魅力の高に関わらず、話し手に興味を持ち、また話相手を好

きになり、会話を楽しんだのである。この結果から、両性具有性型の個人はジェンダー・スキーマを持たないという解釈は不適切であることが示唆される。ジェンダー・ステレオタイプの知識はある。しかしながら、一対一で個人的に話をするという状況では、ジェンダー・スキーマ通りの行動はしない、という過程を経ていると考えられるのである。

本研究は大学生の男女一対一の場面での性役割分担志向性とその実行度、さらに愛情・好意度を取り上げ、性別とジェンダー・タイプ、そしてそれらの交互作用効果を検討するものである。ジェンダー・スキーマ理論と土肥の両性具有性形成モデルに基づいた仮説は次の通りとなる。(1) 男女の一対一の場面での行動を男性的・女性的として役割分担を志向する傾向はジェンダー・スキーマの強さによって規定される。従ってジェンダー・スキーマ理論からは、男性的男性・女性的女性はその傾向が強くなるであろう。また両性具有性形成モデルからは、両性具有型は社会一般でのジェンダー・ステレオタイプを知識として持っていると考えられる。従って、男性的男性・女性的女性に加えて両性具有型も男性的・女性的行動とカテゴリー化する傾向は強いであろう。ジェンダー・スキーマが弱いと考えられる未分化型の個人は、役割分担志向性は低いであろう。(2) ジェンダー・スキーマ理論からは、親密な関係での男女一対一の行動場面でも、男性的男性・女性的女性はジェンダー・ステレオタイプにそった行動をするであろう。一方、両性具有性形成モデルからは、両性具有型の個人にとって親密な男女一対一の現実場面においてはジェンダー・ステレオタイプは考慮されにくくなるであろう。従って、両性具有型の個人はジェンダー・ステレオタイプにそった行動はとらないであろう。未分化型の個人は行動場面においても役割分担は生じにくいであろう。(3)

両モデルから示唆されることとして、男性的男性・女性的女性はジェンダーを重視した関係しか持てない。個性を発揮した。人格的な付き合いではない。したがって愛情度や好意度はそれらの個人においては、低く、両性具有型の個人で高くなるであろう。

以上の仮説をまとめたものが Table 1 である。

〈方法〉

- 調査対象者 関西在住の大学生177名（うち男性86名、女性91名）
- 調査実施日時 1990年10月・11月
- 調査方法 質問紙調査を授業時間中に実施した。
- 主な質問項目

(a) 男女一対一の場面での行動（男性的行動・女性的行動・中性的行動の各6項目）：本調査の約1ヶ月前に、以下の手続きで予備調査を行った。まず、恋人もしくは異性の友人との場面を思い出させた。次に、「あなたは相手の方と一緒にいる時、主にどちらか一方が分担する役割行動がありますか。箇条書きで、あなた（もしくは相手）の役割行動をいくつでも自由に列挙して下さい。」と質問した。その結果、108項目が収集された。それらの項目を男女別に内容の重複や意味の明確さなどの点から整理し、30項目を候補項目とした。

本調査の手続きは以下の通りである。まず予備調査で得られた30の候補項目について、それぞれの行動は一般的に行って男女どちらがするのがふさわしいと思うか、を5件法で設定させた（以下、分担志向性得点とする）。反応形式は、「1. 男がふさわしい、2. どちらかといえば男がふさわしい、3. どちらでもない、4. どちらかといえば女がふさわしい、5. 女がふさわしい。」である。

次に恋人もしくは異性の友人がいる人はその人

Table 1 本研究の仮説

		両性具有型	男性的男性 女性的女性	未分化型
分担志向性	Bem(1981)	低	高	低
	土肥(1995)	高	高	低
分担実行度	Bem & 土肥	低	高	低
愛情・好意度	Bem & 土肥	高	低	低

との場면을想起させ、また、いない人はいると想定して、あるいは過去の経験を思い出して、それらの特定の異性と一緒にいる時、各行動をどのくらい頻繁にするか、を5件法で評定させた(以下、分担実行度得点とする)。反応形式は、「1. 全くしない、2. ほとんどしない、3. たまにする、4. 時々する、5. よくする」である。

(b) 愛情・好意尺度：Rubin (1970) の Love-Liking scale 26項目を藤原ら (1983) が邦訳したもので、愛情・好意各13項目よりなる。各項目がどのくらい自分にあてはまるかを5件法で評定された。反応形式は、「1. ほとんどあてはまらない、2. あまりあてはまらない、3. どちらともいえない、4. ややあてはまる、5. よくあてはまる」である。13項目の合計点をそれぞれ愛情度得点、好意度得点とした。高得点ほど、愛情度・好意度が高いことを示す。

(c) ジェンダー・パーソナリティ尺度：伊藤 (1986) の性役割測定尺度 (ISRS) を用いた。それぞれの性格特性が自分にどのくらいあてはまるかを5件法で評定させた。反応形式は、「1. ほとんどあてはまらない、2. あまりあてはまらない、

3. どちらでもない、4. ややあてはまる、5. よくあてはまる」である。高得点ほど男性性・女性性が高いことを示す。これらの2得点のメディアン分割 (男性性得点のメディアン値は36点、女性性得点のメディアン値は44点) により、被験者のジェンダー・パーソナリティを4タイプ (両性具有型・男性性優位型・女性性優位型・未分化型) のいずれかに分類した。各ジェンダー・タイプに含まれる対象者数は Table 2 の通りである。

〈結果〉

(1) 質問紙を回答するにあたって調査対象者が想定した相手は Table 3 の通りである。

(2) 調査対象者の属性；年齢、交際期間、相手の年齢などの平均点は Table 4 の通りである。

(3) 男女一対一の場面での役割行動；予備調査によって得られた30項目のそれぞれについて、それらの分担志向性得点の全被験者による平均値を求めた (Table 5 参照)。そして、その平均値の高いものから6項目を女性的行動、平均値の低いものから6項目を男性的行動、平均値が中立点 (3

Table 2 各ジェンダー・タイプに含まれる対象者数

	両性具有	男性性優位	女性性優位	未分化	計
男性	28	23	13	17	81
女性	31	12	20	33	96
計	59	35	33	50	177

Table 3 対象者が想定した相手

	恋人	異性の友人	片思いの人	過去の恋人	架空の人物
人数	62	40	31	31	12
	(35.2%)	(22.7%)	(17.6%)	(17.6%)	(6.8%)

Table 4 調査対象者の属性

変数	平均値	(S. D.)	備考
年齢	20.8	(1.32)	
相手の年齢	21.3	(2.20)	N = 170
交際期間 (ヶ月)	13.8	(11.5)	恋人のいる場合のみ
過去の恋愛回数	2.2	(1.76)	片思いは除く
愛情度	47.5	(8.45)	
好意度	45.8	(8.73)	
男性性	36.7	(7.37)	
女性性	43.5	(7.28)	

点)に近いものから6項目を中性的役割行動とカテゴリー化した。

#### (4) 仮説の検証

以下の変数に関して、調査対象者の性別(男性・女性)とジェンダー・タイプ(両性具有型・男性性優位型・女性性優位型・未分化型)の主効果、またそれらの交互作用効果を分散分析によって検討した。

##### ① 男性的・女性的・中性的行動に対する分担当向性

Table 5に示す通り男性的・女性的・中性的行動としてカテゴリー化された項目群ごとの分担当向性得点の合計点を求め、分散分析を行った。結果はFig.1の通りである。<sup>2)</sup> 中性的行動においてのみ、性別の効果が認められ( $F(1,169) =$

$29.95, p < .001$ ; 男性  $M = 16.81$ , 女性  $M = 18.34$ )、中性的行動を男性にふさわしいと考える傾向は女性より男性の方が強いことが分かった。言い換えれば中性的行動を女性にふさわしいと考える傾向は男性より女性の方が強いということでもある。従ってこれらをまとめると、中性的行動に対しては、男女とも自分自身の性によりふさわしいものとしがちであると言える。また、男性的行動をより男性にふさわしいと考える傾向に男女差はなく( $F(1,169) = .03, n. s.$ ; 男性  $M = 9.29$ , 女性  $M = 9.37$ )、同様に女性的行動をより女性にふさわしいと考える傾向にも男女差はなかった( $F(1,169) = .03, n. s.$ ; 男性  $M = 22.91$ , 女性  $M = 22.84$ )。

ジェンダー・タイプの効果、および交互作用効

Table 5 男女一対一の場面での行動的分担当向性得点

項目	平均	S. D.	カテゴリー
1. 相手を家に送る	1.42	.61	男性的
2. 重い荷物を持つ	1.44	.60	男性的
3. プロポーズをする	1.49	.77	男性的
4. 相手をエスコートする	1.63	.64	男性的
5. 並んで歩く時、車道側を歩く	1.67	.74	男性的
6. 車の運転をする	1.68	.77	男性的
7. ベットに誘う	2.02	.89	
8. デートの行き先を決める	2.20	.83	
9. デートプランを立てる	2.25	.71	
10. 食事やお茶のお金を払う	2.28	.69	
11. デートに誘う	2.31	.72	
12. ムードをもちたてる	2.63	.70	
13. 知識・情報を提供する	2.67	.68	
14. プレゼントをする	2.69	.70	
15. 会話をはずませる	2.69	.78	
16. 自分の意見を言う	2.76	.68	
17. 相手の服や趣味などをほめる	2.84	.60	
18. 電話をかける	2.85	.69	
19. 食事のメニューをきめる	2.86	.73	中性的
20. 別れを切り出す	2.90	.68	中性的
21. けんかをした時、先に折れる	2.92	.80	中性的
22. 相手の話をきく	2.93	.70	中性的
23. 相手のことを思いやる	2.98	.60	中性的
24. 相手を励ます	3.04	.66	中性的
25. 相手のために買物に行く	3.27	.76	女性的
26. ノートをとったり、テストの資料を回す	3.37	.70	女性的
27. 手紙を書く	3.63	.70	女性的
28. こまやかな世話をする	3.92	.85	女性的
29. 相手の部屋をそうじする	4.17	.81	女性的
30. 食事や弁当をつくる	4.57	.68	女性的

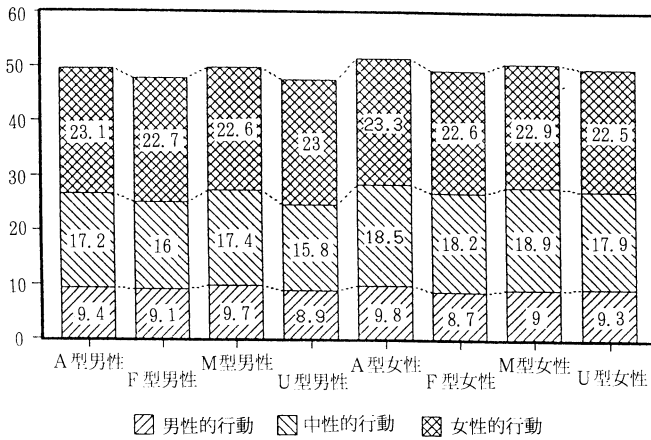


Fig. 1 男性的／中性的／女性的行動分担志向性

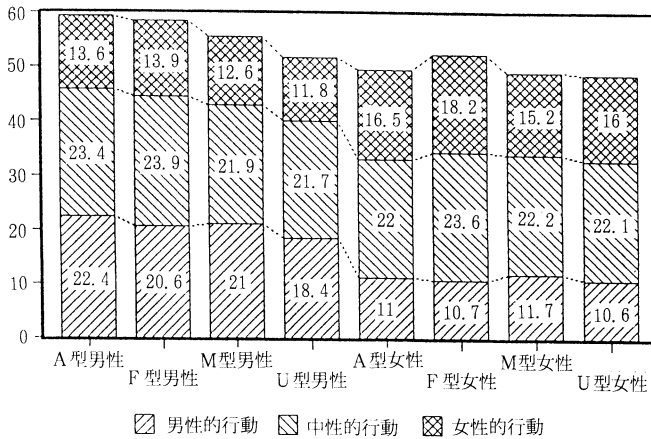


Fig. 2 男性的／中性的／女性的行動分担実行度

果はいずれの行動群の性別化得点、すなわち男女間の役割分担志向性においても認められなかった。

②男性的・女性的・中性的行動の分担実行度

Table 5 に示す通り男性的・女性的・中性的行動としてカテゴリー化された項目群ごとの実行度得点の合計点を求め、分散分析を行った。結果は Fig.2 の通りである。男性的行動 (F (1,169) = 227.55, p < .001; 男性 M=20.90, 女性 M=10.94)、女性的行動 (F (1,169) = 33.86, p < .001

; 男性 M=13.01, 女性 M=16.57) において性別の効果が認められた。これは、男性的行動は女性よりも男性が、女性的行動は男性よりも女性が、実際にも分担をしている、つまりジェンダー・ステレオタイプと一致した分担をしている、ということである。ジェンダー・タイプの効果は、女性的行動において傾向が認められた (F (3,169) = 2.25, p < .1) にすぎなかった。具体的には、女性性優位型は未分化・男性性優位型よりも頻繁に女性的行動を実行していた。性別とジェ

2) Fig. 1 から Fig. 4 の A 型は両性具有  
F 型は女性性優位型  
M 型は男性性優位型  
U 型は未分化型を略したものである。

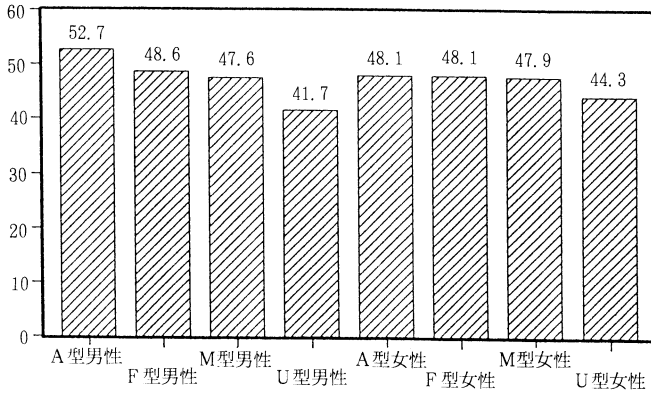


Fig. 3 愛情度得点

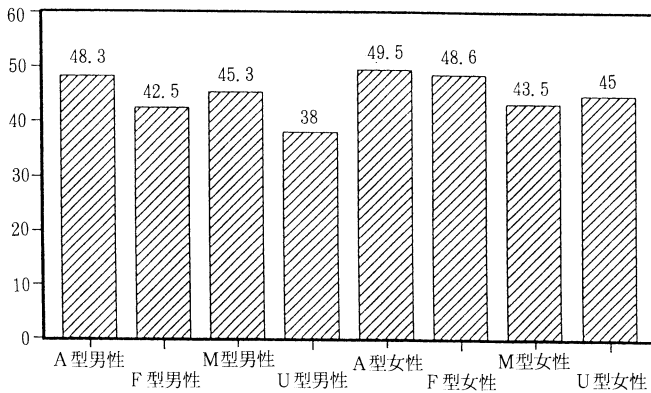


Fig. 4 好意度得点

ンダー・タイプの交互作用効果は認められなかった。

〈考察〉

③愛情・好意度

愛情度については性別の効果が認められなかった ( $F(1,169) = 1.62, n.s.$ ) が、ジェンダー・タイプの主効果が有意であった ( $F(3,169) = 6.38, p < .001$ )。ダンカンの多重比較検定の結果、未分化型は他の3型に比べ、愛情度が低いことがわかった (Fig. 3 参照)。好意度については、性別 ( $F(1,169) = 4.73, p < .05$ )、ジェンダー・タイプ ( $F(3,169) = 6.04, p < .001$ ) の両方の効果が有意であった。ダンカンの多重比較検定の結果、男性よりも女性の方が、また男性性優位型・未分化型よりも両性具有型の方が、好意度は高かった (Fig. 4 参照)。

本研究は、男女一対一の場面での態度や行動、感情に関連する要因として、ジェンダー・タイプと性別の効果を検討した。具体的には、社会一般で認められる性役割分担への志向性、親密な関係にある特定の異性との間の分担実行度、そして愛情・好意度を質問紙調査した。本研究の結果に基づく考察は以下の通りである。

まず、男女間の役割分担への志向性について、つまりどの程度男性的行動としてふさわしいと考えるか、女性的行動としてふさわしいと考えるかの判断においては、ジェンダー・タイプの効果、性差の効果、交互作用効果はいずれも認められなかった。これを Bem (1981) のジェンダー・スキーマ理論と土肥 (1995) の両性具有性形成モデルからの仮説に照らし合わせていく。ジェン

ダー・スキーマ理論からは、男性的男性・女性的女性のジェンダー・スキーマが強く、役割分担志向性も強いという仮説が提供された。しかしこれは支持されなかった。ジェンダー・パーソナリティと同一因子のジェンダー・スキーマだけからでは、役割分担への志向性は規定されていないことが示唆される。一方土肥の両性具有性形成モデルでは男性的男性・女性的女性と同様に両性具有型の個人も社会一般でのジェンダー・ステレオタイプを知識として持っていると考えられる。従って、男性的男性・女性的女性に加えて両性具有型も役割分担への志向性は強いと仮定された。結果は、男性的男性・女性的女性と同様、両性具有型の個人も役割分担志向性が高かったため、ジェンダー・スキーマ理論の仮説よりは妥当性があったと認められるかもしれない。ただし、両性具有性形成モデルからは、未分化型はジェンダー・スキーマもジェンダー・アイデンティティも低いと考えられるため、役割分担志向性は低くなるべきであった。ところが未分化型も他のジェンダー・タイプと同程度の志向性レベルだったのである。

以上のように、ジェンダー・タイプの効果が認められなかったことに対する考察は、以下の通りである。まず第一に、調査対象者の大学生の恋愛関係がどのような機能を果たしているか、の問題があると考えられる。近年の青年期におけるデートは、社会的成熟や社会生活への適応にとって必要なものを身につける場としての機能や、結婚と家庭生活への準備のための機能が相対的に低下している。そして、その代わりに優越してきた機能がレクリエーションの一形式としての機能や、青年社会における地位獲得の手段としての機能である(野村, 1981)。本研究の対象者についても、具体的な配偶者選択の時期にはまだ遠く、男女一対一の関係においてはレクリエーションとしての機能が重視されていると考えられる。そのため、ジェンダー・ステレオタイプと一致した行動への期待が高く、ジェンダー・スキーマの有無とは関係なく両性具有性であってもまた未分化型であっても、男性的男性・女性的女性と同様の分担志向性を示したものとして考察できるのである。

第二に測度の問題がある。現在のところ、ジェンダー・スキーマ理論の妥当性を検討するために

用いられる測度は、本研究で用いたようなアンドロジニー・スケールである。しかし、男性性・女性性はジェンダー・スキーマによって形成される、一側面にすぎない。ジェンダー・スキーマという認知図式やジェンダー・アイデンティティが及ぼす恋愛への影響は、それらの構成概念それ自体を測定するための尺度などを用いるべきであろう。例えば、石田(1994)のジェンダー・スキーマの認知相関指標、また土肥(1994b)のジェンダー・アイデンティティ尺度などが有効であろう。

次に役割分担実行度については、男性的行動・女性的行動における性差の効果だけが顕著に認められた。これを Bem(1981)のジェンダー・スキーマ理論と土肥(1995)の両性具有性形成モデルからの仮説に照らし合わせていく。ジェンダー・スキーマ理論からは、男性的男性・女性的女性はジェンダー・スキーマが強いとされる。従って個人的な男女一対一の場面においても、ジェンダー・スキーマの働きによって、ジェンダー・ステレオタイプにそった行動をすると仮定された。両性具有性モデルはその仮説を補い、両性具有性の個人は個人的な男女一対一の場面においては、ジェンダー・ステレオタイプにそった行動はとらないであろう、と仮定された。調査の結果は、性別の効果は認められただけであった。男性的行動は女性よりも男性が、女性的行動は男性よりも女性も実際に分担しているということである。ジェンダー・タイプの効果は、女性性が高いと、女性的行動を実行する傾向がやや高いという程度であった。

以上のように実行度においてもジェンダー・タイプの効果が認められなかったことに対する考察は、以下の通りである。第一に、本研究での調査はレクリエーションとしての機能を重視した恋愛関係にあったと考えられること、ジェンダー・スキーマ理論などを検討するための測度が不十分であったことなどがあげられる。これらは役割分担志向性に関する考察と共通するものである。第二に本研究の対象者の属性についての問題である。Table 2で明らかなように、調査時点で現実の交際相手を持っているものは、全体の35.2%にすぎなかった。従って本研究で現実の相手を前にして



の実際行動を調査したつもりでも、回答者は観念的な回答をした可能性は高い。さらに一対一の行動に関する調査ではあったが、実際の行動を観察したのではなかった。

最後に愛情・好意度に関する仮説は、以下の通りであった。男性的男性・女性的女性はジェンダーを重視した関係しか持てないため、愛情度や好意度はそれらの個人においては低く、両性具有型の個人で高くなるであろう、というものである。結果は、愛情度に関してジェンダー・タイプの効果が認められ、未分化型はそれ以外のいずれのタイプよりも低かった。好意度は性差の効果があり、男性よりも女性の方が高かった。またジェンダー・タイプの効果も認められ、未分化・男性性優位型よりも両性具有型の方が好意度が高いことが明らかになった。

未分化型のジェンダー・タイプの愛情度・好意度が低かったことに関しては、以下のように考察する。愛情や好意は、恋愛の感情の側面にすぎない。しかし少なくともそこにおいては、男性性も女性性も求められる、ということである。女性的パーソナリティとしてステレオタイプ化されたパーソナリティ特性は共同性 (communion) や表出的 (expressive) 特性、親和欲求、つまりやさしさや従順さ、繊細さといった特性である。男性的パーソナリティとしてステレオタイプ化されたパーソナリティ特性は作動性 (agency) や道具的 (instrumental) 特性、達成欲求、つまり行動力や自己主張の強さ、決断力の強さなどである (土肥, 1995)。それらは本来、男女に問わず人間として重要な特性である。従って、それらがどちらとも自己概念として備わっていないと、愛情や好意といった恋愛感情は高まりにくいということであろう。

ただし、恋愛感情とは本研究で想定してきたような代替不可能性を確認しあえるようなものではない、という考え方も認めるべきであろう。土肥 (1995) は未分化型はジェンダー・スキーマが低いタイプであると仮定してきたが、その未分化型が愛情・好意度ともに低かったからである。つまり、ジェンダー・スキーマによって非現実的な異性像を描けることが恋愛感情を高めている、と本研究から示唆されるのである。また一般的に言っ

ても、恋愛感情は情熱的ではあるが短期間で消滅したり、のぼせ上がりによって生じる、といった特徴を持ったものと考えられる傾向が強いことも考慮すべきであろう。

本研究では、一対一の男女の役割分担を志向したり実行する傾向にジェンダー・タイプの影響が認められなかった。これに関連し、本研究で取り上げたジェンダー・タイプ、つまりジェンダーの自己概念では、恋愛関係の諸側面は捉えにくいのではないかと考える。本研究のジェンダー・タイプは「個人としての自己概念」であって、恋愛の諸側面は「男女一対としての自己概念」が影響すると考えるべきではなかったか。吉本 (1968) は一対の男女の間の心を「対幻想」とした。そして対幻想は、社会や国家などの共同幻想、個人の自己幻想のどちらからも独立した領域であるとした。共同幻想や自己幻想は次から次へと同質のメンバーを呼び込むホモ志向である。他方、対幻想は二者関係で安定して閉じるヘテロ志向である。人は、対幻想と共同幻想という別々の世界をふたつながら持つことはできる。だが人は、両者の間を往復するだけであって、ふたつを調和させているわけではない (上野, 1986)。

近年、異性愛や母性愛など様々な愛についての心理学的研究がなされるようになった。例えば、同じ異性愛の中にもいくつもの種類が存在するという指摘 (Lee, 1973) や、母性愛を生得的な本能としてとらえることなく社会的に形成されるものとして実証的に捉える研究 (大日向, 1988) 等がなされてきた。このような研究の動向は、「対幻想」の世界での対人関係が考慮され始めたものと言えるかもしれない。しかしながら一対の男女間の関係において、男女が「個人」か「対」のどちらの自己概念をもって行動しているか、といった検討はまだされていない。「対幻想」を持つ個人が社会生活・集団生活の中でどう行動するか、どう2つの世界を使い分けるかといった観点で個人の行動をみることはなかったのではないかと。

社会心理学の研究をおおまかに捉えた場合、それらは社会化によって人格形成した個人に焦点を当てた研究か、あるいは個人が作る集団に焦点を当てた研究かのいずれかであったと考える。個人は社会や国家、特定集団の成員としての行動をす

る。しかしその個人は実は親密な特定の異性との関係を同時に持つ。この点にも考慮すべきではないか。

今後の課題としては、どのようなジェンダー・パーソナリティの組合せが恋愛関係を結びやすいか、あるいは愛情が深まるか、といった点を明らかにしたい。D'Agostino & Day (1991) は、大学生を対象に BSRI によってジェンダー・パーソナリティをカテゴリー化した。そして相補的關係あるいは類似的關係のいずれを相手に求めるか、あるいは与えようとするかを調査した。その結果、男性的男性と女性的女性と未分化型の男女は、より相補的關係を選択した。対照的に両性具有型の男女は類似による關係を選択したのである。

Maccoby & Jaklin (1974) に代表される性差研究は、知能や性格特性等において男女の差異が認められるのは、次の4つのみであることを明らかにした。それは、第一に男性の方が視覚・空間能力があること、第二に男性の方が数学的能力が高いこと、第三に男性の方が攻撃的であること、第四に女性の方が言語能力が高いことである (Fausto-Sterling, 1985)。しかしながら、生物学的な差異、すなわち生殖機能や体格における性差は存在する。本研究では男女一対一の性役割分担行動において、性別の効果だけか顕著に認められた。差はわずかであっても上回る方がそれを分担する、という人間關係の原理に従うとすれば、性役割分業は男女一対一の場面においてこそ、確実に再生され続けるのかもしれない。

#### (引用文献)

- Andersen, S. M. & Bem, S. L. 1981 Sex typing and androgyny in dyadic interaction: Individual differences in responsiveness to physical attractiveness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 74-86.
- Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 155-162.
- Bem, S. L. 1981 Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. *Psychological Review*, 88, 354-364.
- Coleman, M. & Ganong, L. H. 1985 Love and sex role stereotypes: Do macho men and feminine women make better lovers? *Journal of Personality and Social Psychology*, 49, 170-176.
- Crawford, L. Y., Kelley, H. H., Platz, J. B., & Fogel, P. W. 1977 Variations in conflict behavior within close heterosexual relationships. Unpublished manuscript, University of California, Los Angeles.
- D'Agostino, J. V. & Day, S. K. 1991 Gender-role orientation and preference for an intimate partner. *Psychological Record*, 41, 321-328.
- 土肥伊都子 1994a ジェンダーに関する2種のスキーマモデルの比較検討 *心理学研究*, 65, 61-66.
- 土肥伊都子 1994b ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 *日本社会心理学会第35回大会発表論文集*, 380-381.
- 土肥伊都子 1995 心理学的男女両性具有性の形成に関する一考察 *心理学評論*, 37, 192-203.
- Erikson, E. H. 1950 *Childhood and society*. New York: Norton. 仁科弥生(訳) 1977 *幼児期と社会* みすず書房
- Fausto-Sterling, A. 1985 *Myths of gender*. Basic Books Inc. 池上千寿子・根岸悦子(訳) 1990 *ジェンダーの神話* 工作舎
- 藤原武弘・黒川正流・秋月左都士 1983 日本版 Love-Liking 尺度の検討 *広島大学総合科学部紀要* III, 7, 39-46.
- 伊藤裕子 1986 性役割特性語の意味構造——性役割測定尺度 (ISRS) 作成の試み—— *教育心理学研究*, 34, 168-174.
- 石田英子 1994 ジェンダ・スキーマの認知相関指標における妥当性の検証 *心理学研究*, 64, 417-425.
- Knox, D. & Sporkowski, M. 1972 Attitudes of college students toward love. In J. Delora & J. Delora (Eds.), *Intimate life styles: Marriage and its alternatives* (pp. 34-41). Pacific Palisades, CA: Goodyear.
- Lee, J. A. 1973 *The colors of love*. New Press: Ont.
- Lester, D., Blazill, N., Ellis, C., & Guerin, T. 1984 Correlates of romantic attitudes toward love: Androgyny and self-disclosure. *Psychological Reports*, 54, 554.
- Maccoby, E. E. & Jaklin, C. N. 1974 *The psychology of sex differences*. Stanford University Press.
- 松井 豊 1990 青年の恋愛行動の構造 *心理学評論*, 33, 355-370.
- 野村哲也 1981 第6章 思春期の子と親子関係 上子武次・増田光吉(編) *日本人の家族関係* 有斐閣
- 大日向雅美 1988 *母性の研究* 川島書店
- Rubin, Z. 1970 Measurement of romantic love. *Journal of Personality and Social Psychology*,

16, 265-273.

上野千鶴子 1986 女という快樂 勁草書房

Walster, E & Walster, G. W. 1978 A new look at  
love. Reading, MA : Addison-Welsey.

山口素子 1985 男性性・女性性の2側面についての  
検討 心理学研究, 56, 215-221.

吉本隆明 1968 共同幻想論 河出書房